

中国青海省における多民族集落間の水争いとその解決

解決方法の選択背景を探る

上原周子(北海道大学大学院)

これまで、紛争解決に関する研究は主に法学や政治学の分野で行われ、文化人類学では盛んに行われては来なかった。法学や政治学では近年、世界秩序の形成による平和構築というグローバルな視点からの紛争解決研究が展開されている。ただ、そうしたグローバルな世界秩序も、最終的にはそれを受容するローカル側の問題となる(町村 2004)。それを考えれば、グローバルな視点による研究にはローカルの状況までを射程に入れることが必須となるが、それに関する資料や研究の蓄積は非常に少ない。本来ならば、フィールドワークを主たる調査方法とする文化人類学の分野で、その資料収集や研究にあたり、他分野との連携を深めるべきであろうが、そうした兆しはいまだ見られない。ただ、紛争やその解決もまた、人間の営みの1つであり(栗本 1999、煎本 2007)、今後、さらに研究されるべき対象であろう。そこで本発表では、中国青海省における多民族集落間の水争いとその解決の事例を取り上げ、とくに解決方法の選択背景に着目し、ローカルの文脈に則した紛争解決の流儀を明らかにする。

中国青海省海東地区化隆回族自治区は「北高南低」という地勢的な特徴を有し、県内の北と南の高低差は最大2600.7mになる。そのため、慢性的に水が不足しており、青海黄河流域における水土流失嚴重地域の1つとされる(化隆回族自治区地方志編纂委員会編 1993:251)。今回、集中的な調査を行ったA鎮も水利が良い土地であるとは言えず、県内でも特に水土流失が激しい地勢に位置する。近年は各戸に水道管が整備されつつあるが、それまでは集落に1つしかない水道や、山上の湧水などを利用して、水道管に不具合があれば、いまでもそれらを利用する。また、A鎮は農村地帯であるが肥沃な土地とは言えず、灌漑の実施が欠かせない。しかし、慢性的な水不足やインフラの整備不足のために、それがかなわず雨水のみに頼る集落も多い。また、中途半端なインフラの整備が、逆に灌漑用水をめぐる集落間の争いの原因ともなっている。例えばA鎮に属するB村、C村、D村、E村は、4村で1つの用水管を共有し、土地の灌漑を行う。しかし、用水管の共有が原因で、集落間での水盗みや水路の破壊といった妨害が毎年のように起きる。さらに、その妨害が原因となり、灌漑用水をめぐる摩擦や紛争が、隣り合う集落間で大なり小なり勃発するのである。

ただ、その摩擦や紛争の解決方法は一様ではなく、各集落間で異なっている。一様ではない理由は、B村、C村、D村、E村、各集落間に形成される人間関係に付随する利害が異なっていることに依る。A鎮には主にチベット族、回族、漢族の3民族が同居するが、4村は集落を構成する民族がそれぞれ異なっており、集落間の同じ民族同士で親族関係や友人・知人関係を形成している場合が多い。また、異なる民族同士でも地理的な近さによって友人・知人関係を形成している場合がある。そうした親族関係や友人・知人関係は、援助を必要とする日常の様々な側面において力を発揮する。さらに、本県は回族の自治県であることから人民政府の役人にもやはり回族が多く、回族と大きな摩擦や争いを起こすことはチベット族や漢族にとって利益にはならない。このように各集落間には様々な人間関係があり、そこには利害が存在する。そして人々はそれらを考慮しながら、水争いの解決方法の選択にあたるのである。そのために各集落間で解決方法が異なるのである。とくに、集落間の利害が濃く、かつ回族が多く居住するC村の回族とD村のチベット族との間で水に関する摩擦や争いが起きた場合、チベット族は近年、集落間の利害を考慮し、その関係性を維持しようという方向において、真正面から争いを処理しようとはしなくなった。それよりも金銭による解決、あるいはケンカ自体の拒否という紛争回避の方法を選択するようになってきている。つまり、利害がD村のチベット族に紛争を抑制させる要因として働いているのである。集落間の利害は紛争解決方法の選択に影響を与える。さらにその利害が濃いほど、人々は紛争を沈静、抑制させる解決方法を選択することが、本事例からは指摘されるのである。

【参考文献】

- 煎本孝・2007。「アイヌ文化における死の儀礼の復興をめぐる葛藤と帰属性」、『北の民の人類学 - 強国に生きる民族性と帰属性 -』(煎本孝・山田孝子編), 9-36, 京都, 京都大学出版会。
- 化隆回族自治区地方志編纂委員会編・1993。『化隆県志』山西省陝西市, 陝西出版社。
- 栗本英世・1999。『未開の戦争、現代の戦争』東京, 岩波書店。
- 町村敬志・2004。「北京・中関村にみるグローバル化の基層 - ハイテク・ユートピアに埋め込まれた三つの世界 -」, 『情報社会変動のなかのアメリカとアジア』(庄司興吉編), 187-206, 東京, 彩流社。